

佐藤嘉代子（著）

『子どもと保育士がつくる哲学の時間—保育的雰囲気を支える対話的な学びの世界—』

2021年 萌文書林 A5判 223頁 定価（本体3,600円+税）

齊藤 あすみ\*

哲学とは「世界・人生などの根本原理を追求する学問」（デジタル大辞泉）であり、言葉を十分に獲得した大人によってのみ行われる活動であるかのように思われるかもしれない。しかし本書では、子どもとは元来、問う存在であるとして、子どもにとってこそ、世界と真に関わるあり方として哲学が重要であることを指摘する。本書は「子どもが哲学する」とは、「生活の中で不思議だと思ふことを思考しその驚きを内省し言葉を探すこと」であると捉え、「対話」という形式にて「共に考えること」としての哲学を、D保育園5歳児クラスでのアクションリサーチ等と、その分析から丁寧に論じた一冊である。

本書は、2018年度にお茶の水女子大学に提出された博士論文をもとに、加筆修正を加えて刊行されたものである。本書は序章、第1部（第1章から第3章）、第2部（第4章から第6章）、終章から構成されている。

序章では先行研究として、今日までに子どもの哲学がいかに論じられてきたか、諸外国の系譜と日本の系譜がそれぞれ示されている。そのうえで特に幼児の対話による哲学の活動には、語りかけたい存在としての保育士との信頼関係の成立の有無や、その対話をする時の心情が大きく作用するとして、本研究では「子どもと哲学する時間」の活動を、ボルノウの「教育的雰囲気」に着目して検討することを目指すことが記されている。本研究の分析の視座は、ボルノウの著作である『教育を支えるもの』（1964=2006）、『対話への教育』（1973=1973）、『問いへの教育』（1978=1988）の3冊を中心に得られている。ボルノウ（2006）は「教育的雰囲気」を「教師と児童の間に成立し、あらゆる個々の教育的なふるまいの背景をなす感情的な条件と人間的な態度の全体を意味する」ものとして教育に不可欠であると述べた。また「教育的雰囲気」とは、「庇護されている感情」である「被包感(Geborgenheit)」や、子ども・保育者相互の信頼関係により成立する。これらを受けて筆者は、幼い者ほど雰囲気に敏感であることから、保育を考えるうえでボルノウの「教育的雰囲気」の理論は示唆に富むものであると述べる。特にボルノウは教育を「人間をその深いところまでとらえる過程」として指摘しており、このような教育観は、人間を「丸ごと全部見る」ことを求められる保育に通じるところがある。このためボルノウの「教育的雰囲気」とは「保育を支えるもの=保育的雰囲気」として捉えることができると指摘される。本書において「保育的雰囲気」とは「保育する者とそれを受ける者との間に通いあう、保育空間の雰囲気」であり、このような受容的な雰囲気が、自己を打ち明けて話すという哲学の対話には欠かせない。以上のような背景を踏まえ、本研究の目的は、アクションリサーチとして、D保育園5歳児クラスの子どもと哲学する取り組みを行い、ここでの対話の様相と、それにより子ども・保育士・園にいかなる変化がもたらされたかについて探ることである。その際、ボルノウの「教育的雰囲気」を踏まえた「保育的雰囲気」を分析の視座としている。

第1部では、ある保育園5歳児クラスで実際に行われた「子どもと哲学する時間」における対話の特徴が記されている。この実践は月1回の頻度で実施されたものであり、対話のファシリテーターをクラス担任の保育士Bが務め、筆者は観察・記録者として参加している。データの収集は、ビデオカメラ1台とICレコーダー、メモによる記録にて行われた。第1章では、「子どもと哲学する時間」におけるローソクの火に関する子どもの語りの特徴について述べられている。ローソクは輪になって座る子どもたちの中心に置かれたもので、ローソクの火は、生活の中の不思議なことを仲間と対話する特定の時間（「子どもと哲学する時間」）を支えるシンボルとして子どもたちに受け入れられると同時に、火のもつ不思議さについて仲

\* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

間との対話から楽しむきっかけを生み出していたことが明らかにされた。

第2章では、ファシリテーターである保育士Bの提案により「いのち」をテーマに「子どもと哲学する時間」を行った際の、対話内容の特徴と対話を継続させる語り口が明らかにされている。対話では生活の中の「いのち」にまつわる疑問から語られはじめ、それらはセンス・オブ・ワンダー的な語りやアニミズム的な語りであった。ここでの対話は、答えや有用性を求めるものではなく、素朴な疑問からともに生きる世界の神秘への感動を分かち合うような、かけがえのないものであったと報告されている。またこのような対話を持続、発展させるにあたっては、子ども・保育士の双方に「ユーモア感覚」を感じさせる発語があり、明るく温かな笑いを共有する場面があったことが指摘されている。

第3章では、第1章、第2章が子どもと保育士の発言を分析の対象としていたのに対し、その「身体表情」に注目がなされ、分析が行われている。「子どもと哲学する時間」にて、子どもは一時もじっとしておらず、ここから子どもとは、動きながら身体で考え対話していることが明らかとなった。保育士Bは子どもの発言と身体の動きとの両方を、自らの発言と身体で温かく受け止めて応えており、ここから生まれる保育的雰囲気、対話に臨む子どもたちを支えていたことが明らかにされている。

第2部では、「子どもと哲学する時間」によりもたらされた子ども・保育士・園の保育の変容について述べられている。第4章では、自己主張が強いと評される園児Aに焦点をあてた分析から、「子どもと哲学する時間」を通して、園児A自身とクラス子どもたち、また保育士が変容する過程が描かれている。「子どもと哲学する時間」とは、どんな発言も真剣に耳を傾けてもらえるという場であり、園児Aはここで共同体の一員としての立場を確立することができた。保育士の態度が生む保育的雰囲気の下での対話が、子どもたちが互いの個性を理解し、相互に存在を受け止める契機となったことが明らかにされている。

第5章では、「子どもと哲学する時間」をファシリテートする保育士の役割とそこでの葛藤について明らかにされている。「子どもと哲学する時間」において、保育士の役割は重要であり、保育士の応答の仕方が、その後の対話の展開を大きく左右する。そのためファシリテートには高度な保育的配慮が瞬時に求められ、ここで保育士に葛藤が経験されることが明らかにされている。

第6章では、「子どもと哲学する時間」が保育現場において、いかに捉えられていたかについて、その問題点と展望が、アクションリサーチへ参加した保育士らへのインタビューから明らかにされている。「子どもと哲学する時間」は、子どもたちの育ちを支える一方で、そこに参加する保育士にもまた成長をもたらすことから、日々の保育を拓く大きな可能性を持つことが明らかとされている。

終章では、各章のまとめとともに「子どもと哲学する時間」の意義について考察がなされている。幼児期とは話すこと自体を学ぶ時期であり、自分の考えや気持ちを言葉にして話すことが難しいことも多々ある。しかしながら「子どもと哲学する時間」においては、保育的雰囲気、すなわち保育する者と保育される者の間に通い合う雰囲気があり、これが幼児期の子どもたちが、保育士とともに自らの課題を探りながら対話し考えるという哲学の活動を可能にしていた。一方で「子どもと哲学する時間」は単なるくつろいだ雰囲気だけでは成立しえない。本書に描かれた子どもたちは、その対話過程にて保育士の発言の意図を鋭くとらえて受け入れつつ、そこでの問いの深さを吟味して評価している。このような対話への取り組み方は、保育士と子どもたちとの信頼関係の下で生まれるものである。また「子どもと哲学する時間」では、子どもの思考力を育み、多様な問いを生んでいることが明らかとなった。このような子どもの問いをいかに受け止めるかについて葛藤することは、保育士としての新たな学びの契機となり得ることが示された。

昨今では、子どもが「何を学ぶか」という視点と同時に「どのように学ぶか」という視点から、教育を検討する重要性が指摘されており、「対話的な学び」への注目が集まっている。しかしながら対話とは、ともすれば単なるコミュニケーションとして捉えられがちであり、「対話的な学び」についても表面的な意思疎通の達成にて終結してしまう危うさを抱えている。このような状況において、対話という形式にて共に考えることとしての哲学について今一度再考することは、いかなる段階の教育においても示唆に富むものであると考えられる。幼児教育の関係者のみならず、幅広い読者が本書を手取ることを期待する。